

# 21世紀に必要な力を考える

## どんな〈新しい能力〉を 育ててるのか アクティブラーニングを深めるために

松下佳代

京都大学高等教育研究開発推進センター教授



### 〈新しい能力〉の氾濫とその背景

この20年の間、さまざまな「能力」や「力」が教育界で提唱されてきました。例えば、国内では「生きる力」「社会人基礎力」「学力」「学力の3要素」「21世紀型能力」、世界的には「キー・コンピテンシー」「PISAリテラシー」「21世紀型スキル」などなど。私はこのような能力を総称して〈新しい能力〉と名づけました。〈新しい能力〉とは、1990年代頃からの後期近代社会（ポスト近代社会）といわれる社会において求められるようになった能力のことです。

後期近代社会の特徴としてグローバル化、情報化、流動化を挙げることができます。私たちの生き方や働

き方はこういった社会の変化の影響を否応なく受けています。例えば、情報化。ウインドウズ95の発売に沸いたのが1995年。それから20年、今やAIが囲碁のトップ棋士を打ち負かし、自動運転の車が公道を走り、雑誌記事でさえAIが書く時代です。子どもたちが社会人として生きていく頃にはもつと大きく変わっていることでしょう。オックスフォード大学のC・A・フレイとM・A・オズボーンは、2013年に出した「雇用の未来」という論文のなかで、10〜20年後には、今ある702の職種のうち47%がコンピュータに代替されるだろうと予測しています。

流動化には空間と時間の両方の意味があります。例えば、人びとが国境をこえて行き来しながら学び、働

くようになったことは、空間的な意味での流動化です。人生で、いったん就職してまた大学に戻るといったことには、時間的な意味での流動化も含まれています。

流動化はリスク化もはらんでいます。特に日本の場合、1990年代半ば以降、終身雇用制という定番が崩れて、人びとが自らの力で人生のさまざまな局面を切りひらいていかなければならなくなってきました。グローバル化は流動化を推し進める役割を果たしています。

このような後期近代社会の特徴は、多かれ少なかれ、また多少時期のずれはあれ、多くの国々で見られます。だからこそ、後期近代社会において必要な〈新しい能力〉が世界的な関心事になっているわけです。

### 〈新しい能力〉をどう捉えるか

〈新しい能力〉は、冒頭に挙げたようにさまざまな「○○力」の総称ですが、私がこのような総称を使ったのは、まずは一括りにした上で、一つひとつ検討して、そのなかから教育目標として価値のあるものを選択したり、再構成したりしようと考えたからです。

### OECDのキー・コンピテンシー

〈新しい能力〉のなかで私が最も共感を覚えるのはOECDのDesign Co.のキー・コンピテンシーです。これは、「充実した人生」と「うまく機能する社会」をもたらすために、国籍・民族・階層・ジェンダーを問わずすべての

個人に形成すべき能力として提案されたものです。

このキー・コンピテンシーは「道具を相互作用的に用いる」「異なる人びとからなる集団で相互に関わりあう」「自律的に行動する」という三つのカテゴリーからなり、それが3次元座標のように組み合わせられて機能すると考えられています。これらは、「対象世界との関係」「他者との関係」「自己との関係」という人間の活動を構成する三つの軸に対応しています。その中心、いわば座標軸の原点にあるのは、思慮深さ (reflectiveness) 振り返って自分でよく考えることです。

### 能力の普遍性と時代性

ところで、こう書くと、これらの能力のどこが新しいのかと感じる方もおられるのではないのでしょうか。

その通りです。人間の活動が主体（自己）、対象世界、他者の三者で構成されるといえるのは、いつの時代も変わらぬ構造です。したがって、能力の3軸構造も一定の普遍性を持つといえてよいでしょう。しかし同時に、その中身は時代によって変わってきます。

例えば、対象世界には、かつてなかったような地球規模の課題（例えば、持続可能な発展や格差の縮小など）が含まれるようになり、その際、道具として外国語や科学、政治、テクノロジーなどの知識やスキルが必要とされるようになりました。また、他者の範囲は大きく広がり、人種・民族・宗教・文化などの異なる他者と協働したり、対立を何とか調整したりすることがいっそう重要になってきています。さらに、人生のプランを立てたり、人生で何度も学び直

したりする能力も、これまで以上に求められるようになってくるでしょう。

### 学力の3要素

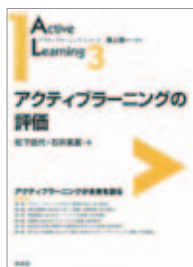
では、「学力の3要素」は、〈新しい能力〉としてどんな特徴を持っているのでしょうか。ご存知のように、学力の3要素は、2007年の学校教育法改正で条文に加えられました。2014年12月の高大接続改革答申や次期学習指導要領の議論のなかで内容や適用範囲が拡張され、今や初等中等教育だけでなく高等教育（大学のアドミッション・ポリシー）にも影響を与えています。その中身は、①知識・技能、②思考力・判断力・表現力等の能力、③主体性を持つて多様な人びとと協働して学ぶ態度の三つにまとめられています。とり



松下佳代編著、ミネルヴァ書房、2010年発行

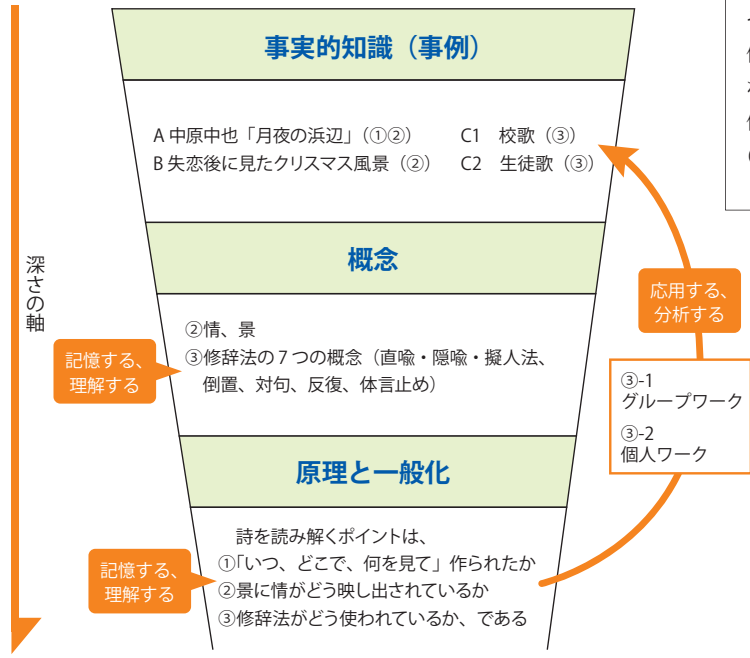


松下佳代他編著、勁草書房、2015年発行



松下佳代・石井英真編、東信堂、2016年発行

【図2】アクティブラーニングの例  
〔教材〕詩（中1国語）



教材  
**月夜の浜辺**  
 月夜の晩に、ボタンが一つ  
 波打際に、落ちていた。  
 それを拾って、役立てようと  
 僕は思ったわけでもないが  
 なぜだかそれを捨てるに忍びず  
 僕はそれを、袂たもとに入れた。  
 (後略)  
 中原中也「月夜の浜辺」より抜粋

こうして詩を読み解くポイントをつたえ、理解した後、修辭法の知識を応用(活用)して、この学校の校歌を分析するという課題に、生徒たちはグループワークで取り組みました。学校の理念が盛り込まれた、新入生合宿で習ったばかりの校歌です。これには自校教育的な意味合いもありました。その後、グループワークで出てきた意見をクラス全体で共有すると、先生が想定していなかったような意見も出てきました。そして、

応用する、分析する

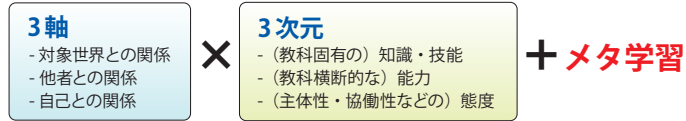
③-1 グループワーク  
③-2 個人ワーク

記憶する、理解する

記憶する、理解する

形式の授業でした。ここまででは教師主導の授業で、生徒がやっている認知活動は主に、「記憶する」「理解する」です。

【図1】能力の3・3・1モデル  
(3軸×3次元とメタ学習)



わけ②の能力には、PISAリテラシーの影響がはつきり見てとれます。この3要素は、私の見るところ、知っていること(Knowing)・行うこと(Doing)・あること(Being)に対応しています。OECDがEducation 2030事業で主唱している、「21世紀の学習者のための4次元の教育」では、知識、スキル、人格(Character)にメタ学習が加わって4次元になっていますが、最初の三つはやはり knowing・doing・being に対応している。学力の3要素と共通しています。

先ほど挙げた3軸が、能力を育てる関係性(対象世界との関係、他者との関係、自己との関係)に焦点をあてていたのに対し、こちらの3次元は、育てたい能力に包摂される人間の属性に焦点をあてています。そしてどちらも、「思慮深さ」「メタ学習」といった形で、自分の学びを振り返り、必要とあれば学び方を変えることに特別な位置を与えています。この「3軸×3次元とメタ学習」(図1)、そして「普遍性と時代性」という視点を持つことで、氾濫する「新しい能力」を整理するためのメガネが得られるのではないのでしょうか。

どのような学びが必要なのか

アクティブラーニング・ブームに釘を刺す

ただし、能力リストをいくら作っても、実際の学習活動に具体化されなければ意味がありません。こういった「新しい能力」を育てるために推進されているのが、アクティブラーニングです。一昨年来のアクティブラーニング・ブームで、ペアワークやグループワーク、ディスカッション、振り返りなどを入れて、子どもに外

「深い学び」に「対話的な学び」を結び付ける

化(書く、話す、発表するなど)をさせればアクティブラーニング、といった型だけのアクティブラーニングも広まってきているように感じます。すでに文科省自身が、アクティブラーニングによってめざしているのは、特定の型を普及させることではなく、「深い学び」「対話的な学び」「主体的な学び」を通して、必要な資質・能力を総合的に育むことだ、と釘を刺しているほどです(中央教育審議会教育課程企画特別部会「論点整理」2015年8月)。

先日参観した中1国語の「詩」の授業を例にとってお話ししましょう(図2)。

深い学びをするために必須の条件は、事実に知識(事例)だけでなく、その根底にあつて他の事例(ときには他の分野)にも使えるような概念や原理、一般化が明確で、深さの軸にそつた上り下りが豊かになされていることです。この授業では、中原中也「月夜の浜辺」のボタンや自分が失恋後に見たクリスマス風景などの例を使いながら、詩を読み解くポイントとして、①「いつ、どこで、何を見て」作られたか、②景に情がどう映し出されているか、③

中1国語の「詩」の授業から

さらに今度はこの学校にもつと古くからある美文調の生徒歌を素材として、個人ワークで修辭法の概念を応用、分析するという課題が提示され、この授業は終わりました。

この二つの素材への「応用する」「分析する」活動を通して、修辭法が理解し直され、より深い理解になっていくのです。新しい素材がどう分析できたかは、理解の形成的評価の役割も果たしています。

力」を意識してみると、授業の特徴や課題がより明確になってきます。

例えば、この授業は、先ほど述べたように、まだ他者との関係づくりや主体性・協働性という点では弱いですが、今回は事実に知識(事例)から概念や原理、一般化へ「下りる」ところは説明形式でしたが、単元や教科によっては、あるいはもつと生徒たちの力がついた段階では、「下りる」プロセスも、生徒主導の活動にしていくことが考えられます。

入学直後の4月中旬の授業なので、この時点ではまだ生徒同士の活動は限られていましたが、その後、情報を共有するのに便利な「ロイロノート」や「まなボード」なども使いながら、個人ワークやグループワークの成果を共有するための試みもなされています。こうして「深い学び」に「対話的な学び」も結び付けることで、「新しい能力」を育てるためのアクティブラーニングが具体化されつつあるのです。

アクティブラーニングは時間がかかるのでよくいわれますが、ICTツールを使うことでグループ内やクラス全体での共有がやりやすくなりますし、子どもたちのICTリテラシーを高めることにもつながります。

こんなふうに、どんな「新しい能力」を育てるのか、それをどう育てるかを意識することで、アクティブラーニングの質を高める視点が得られるのです。

「新しい能力」を意識すること

このような授業はそれほど目新しいものではないと思います。むしろオーソドックスな授業といつてもよいかも知れません。ただ、「新しい能

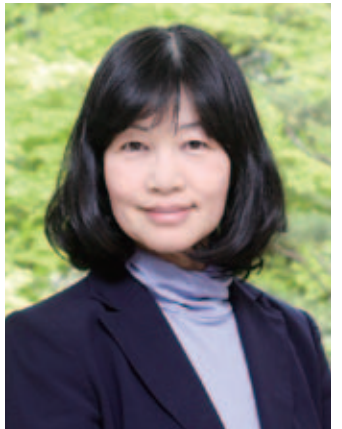
※1 大学の入学者受け入れ方針。大学の特色や教育理念などに基つき、求める学生像をまとめたもの。

※2 自分の学びについての振り返りを行いながら、学び方について学ぶこと。能力は固定的ではなく伸ばせるというマインドセットも含む。

# 21世紀に必要な力を考える

## 自己表現への意欲が学ぶ力に

京都府立園部高等学校指導教諭 田中容子



「自ら思考判断し、意見を発信する力」は英語教育を舞台としたときどのように形成されるのか？—それを考えるとき私の脳裏に浮かぶのは、過去に出会った授業の成立に困難を極めたあるクラスです。当時、私はそのクラスで英語II(30人)と選択科目の英会話(7人)を担当していました。どちらの授業も最初は大変苦労しましたが、より困ったのは英会話のほうでした。始業のベルと同時に机に突っ伏して寝てしまう生徒たちを前にして、私は当初なすすべがなかったのです。しかし、試行錯誤のなか、「何をやるにしろ英語を使えば英会話の授業になる」との判断から英語を使った「ホットケーキ作り」に取り組んだとき、転機が訪れました。ホットケーキを作る工程を単純な英語で表現し、それを練習したのちに、

「調理中は英語で」という約束をして、ホットケーキを焼いたのですが、「Put a cup of flour. And a cup of milk. Is it good?」等の英語を私が発話し、生徒たちから「OK!」「Oh, it's good!」などの応答がなされました。一見してごく単純な言語活動にもかかわらず、そこには生徒たちの生き生きと取り組む姿があり、ここにその後の授業展開への大きなヒントがあったのです。言語活動が生徒にとって現実感のあるものであれば授業が生徒に関わりのあるものとなり、授業の場が生徒の主體的な居場所となるのだ、という気づきを得た瞬間でした。

聴きとる活動に生徒たちを引き込んでいきました。例えば積み木の塔から積み木を一本ずつ抜いていくゲームで、自分の抜いた積み木に「How old are you?」と書かれてあれば、英語でそれに答える、「Please ask Mayumi! How old she is?」と書いてあればそのクラスメートに英語で質問する、というふうに、生徒たちのダイナミズムに依拠した形でどんどん言語活動を進めました。「How old are you?」の積み木を引き当てたBくんは、「16歳やけど、16ってどう言うの?」とつぶやき、「オマエ、sixteenも知らんのけ」とAくんが教える、という場面なども生まれました。そして、この英会話の授業で見出された活路を私はそのまま英語IIの授業に応用しました。さまざまな試行錯誤はありましたが、生徒たちは次第に授業に参加し始め、

最後には英語で写真集を制作して卒業していきました。「学習活動の当事者」になった生徒たちの力は私の想像を超えたものでした。本校には異なる四つのコースがあり、高校入学時にすでに英字新聞を読む英語力を持っている生徒もいれば、英語の語順への理解から学び直す生徒もいます。私たち英語科は多様な生徒たちを多様な角度から評価

することをめざして、ここ10年来パフォーマンス課題を取り入れてきました。パフォーマンス課題とは、生徒に現実の世界からの挑戦や問題を模した課題を与えることで、「真正性」を教室にもたらそうとするものです。生徒が獲得した知識やスキルを応用して現実的な状況や文脈で使いこなせるかどうかを評価するために用います。唯一の正しい方法や応答

英語の得意不得意にかかわらず、すべての生徒にとって英語による意見の発信は可能です

### Cheer up! 3-1

このコースで卒業までに育てる英語の力\*読み力:文構造を理解し、前からすばやく内容をつかんで読み進めることができる。物語文をどんどん読める。評論文の論旨の展開が理解できる。書く力:興味のある幅広い分野に関して、理由や説明文などを加えて、より具体的に意見や感想を書くことができる。

Name \_\_\_\_\_ 2008-10-30  
英語を話す。以下の問いをそれぞれ違う人に対してして、答えを書き取ってください。  
Who did you do last night? 誰に? ( ) 応答 \_\_\_\_\_  
What time did you get up this morning? 誰に? ( ) 応答 \_\_\_\_\_  
What is your town's name? 誰に? ( ) 応答 \_\_\_\_\_  
Do you have brother or sister? 誰に? ( ) 応答 \_\_\_\_\_  
英語を書き取る。話される英語を聞き取って書いてください。

「クマのぶーさん」から  
1 One day when he was out walking, he came to an open place in the middle of the forest, and in the middle of this place, there was a large oak tree, and, from the top of the tree, there came a loud buzzing-noise.  
2 Winnie-the-Pooh sat down at the foot of the tree, and put his head on his paws and began to think.  
3 "That buzzing-noise means something."  
4 If there is a buzzing-noise, somebody is making a buzzing noise.  
5 Maybe a bee is making a noise.  
6 What is it doing?  
7 I'm sure it is making honey. Why? For me!  
8 He began to climb the tree.  
もう少しでハチミツに届きそうになって、ブーが次の枝に乗ったとたん、「ボキン!」枝が折れました。

今回紹介したクラスで使っていたワークシート。生徒が飽きないように、話す・聴く・読む・書くの4種類の言語活動を一回の授業に盛り込んでいく。生徒が興味を持てるよう、英文はA.A.ミルンの"Winnie-the-Pooh"の原文から抜粋した。

はなく、さまざまな思考、判断、表現が求められる、生徒に能動的な参加を求める評価課題です。私がこれまで生徒たちと取り組んだ課題には、「学校であなたが一番気に入っている場所を写真に撮り、なぜその場所がお気に入りなのかを説明してクラスメートに紹介してください」「研修旅行が終わりました。今回の旅程のなかで後輩に最もおすすめしたい場所や活動をひとつ、英語で紹介してください」などがあります。課題に対

# 特集 21世紀に必要な力を考える

## TOKのねらい

1. 知識の構築に対する批判的(クリティカル)なアプローチと、教科学習、広い世界との間のつながりを見つける。
2. 個人やコミュニティーがどのようにして知識を構築するのか、その知識がどのように批判的に吟味されるのかについて、認識を発達させる。
3. 文化的なものや豊かさに対して関心を抱き、個人的な前提や、イデオロギーの底流にある前提について自覚的になる。
4. 自分の信念や前提を批判的に振り返り、より思慮深く、責任意識と目的意識に満ちた人生を送れるようにする。
5. 知識には責任が伴い、知ることによって社会への参加と行動の義務が生じることを理解する。

「知るための方法」の「言語」の解説文(抜粋)

## 言語

言語はどのように知識を形成するのか。ある「知識の領域」における言語の重要性によって、その領域が特定の文化に縛られることはあるのか。知識の構築に際して、比喩はどのように用いられるか。

言語とは、人間が学習し複雑な意思疎通の体系を使用するうえで、それを可能にする心的能力を指し、またはその体系そのものを指すこともあります。言語は、「記号」の体系によって構成されています。意思を疎通する、考えを説明する、知識を蓄積する、あるいは思考の媒介とする目的で、一定の規則に則してまとめあげられた合意済みの慣習的な意味が、これにより伝えられます。……(後略)

出典：ディプロマプログラム(DP)「知の論理」(TOK)指導の手引き(非営利教育財団国際バカロレア機構)

2009年に国際バカロレア(IB)ワールドスクールとして正式な認定を受けて以降、玉川学園では教科のカリキュラム構築やIBプログラムの実践に取り組んできました。  
\*ディプロマプログラム(DP)では、IBの学習者像である「探究する人」「知識のある人」「考える人」「コミュニ

ケーションができる人」「信念をもつ人」「心を開く人」「思いやりのある人」「挑戦する人」「バランスのとれた人」「振り返りができる人」の育成をめざし、「知の論理」(TOK: theory of knowledge)などをコアとした実践手段を導入しています。  
TOKは、「知る」ためのプロセス

を探究し、批判的に考える力を養う授業で、DPを履修する生徒全員が最低100時間以上取り組むことになっていきます。TOKでは、「私たちは知っているということ」をどのようにして知ることなのか(How do we know what we know?)をややまな文脈で考察していきます。教師は、ただ生

## 思考習慣を身につける TOKにおける指導と学習 カメダクインシー

玉川大学学術研究所K-16一貫教育研究センター講師  
前玉川学園中学部・高等部教諭



最近のものなから、高校生が自分の進路について真剣に考え始める2年生3学期に行った、「ALTとのインタビューで自分の将来設計を英語で述べ、質問に答える」というパフォーマンス課題(細野教諭との協同実践)を紹介しましょう。事前の授業で、生徒は自分が表現したい内容に対して必要な英語表現を考え、わからなければ教員に質問し、60〜70ワード程度の英語で自分の将来設計を書きます。そして、ALTとの

Cくんはメモ(右図)を手にALTの先生とのインタビューに臨み、「Why do you like to work in Kyoto city?」と尋ねられて、「Because I like the city.」と答えるなど、意欲的に応答

していました。インタビュー直後の彼の晴れ晴れとした表情からは、「自分の発話がきちんと聴きとられ、それをもとにして応答できた」という成功感・満足感が見てとれました。その後の英語学習でのCくんのスツと伸びた背中が彼の変化を物語っていました。「うーん、なんか突然オーブンしたんすよ」ということは通り、彼のなかでドラスティックな変化が起きたようでした。「自ら思考判断し、意見を発信する力」を育てる授業には、発信への意欲を持てる言語活動と、その活動に取り組める力を育てる教科指導が必要ですが、その両輪

がうまくかみ合うとき、生徒は発信する行為を通じて当の教科力を自ら高めていくのだということにCくんの例が物語っています。  
私たちはさらに、生徒たちに世界の動きに関心を持ち常に自分の意見を持つてほしいと願って、英語メディアから直近のニュースを教材化することに取り組みんでいます。英語の得意不得意にかかわらず、すべての生徒にとって英語による意見の発信は可能です。「I」が主人公の発話が「think」...という意見表明を含む自己表現になれるよう、今後とも実践を重ねていきたいと思っています。



C君が書いた将来設計のメモ  
"My name is \*\*\*\*\*. I'm good at playing volleyball. My favorite things are playing volleyball and read books. I want to work after I graduate from this high school. I want to be independent from my parents. I want to work in Kyoto City. To make my dream come true, I study very hard in school."  
(高校2年生3学期2月。原文ママ)

徒に「教える」のではなく、生徒がすでに持っている多くの経験や知識をもとに、個人はどのようにして物事を知るようになるのか(個人的な知識)、そして社会はどのようにして知識に到達するのか(共有された知識)について考え、その考えを生徒間で共有することができる学習環境を維持していかねばなりません。

私が行った授業の一つに、「知るための方法」を考察するものがあります。TOKは、複雑な世界を探索するのに役立つツールである「知るための方法」として、言語、知覚、感情、理性、想像、信仰、直感、記憶の八つを設定して、そのうちの四つを深く考察するのが適切であるとされています。私は、言語、知覚、感情、理性を取り上げ、ジグソー法(協同学習の技法)を使って、生徒が複数の話題を同時に学んだり、教えたり、議論したりすることで、学習を深め、視野を広げる活動を効果的に行えるようにしました。

まず、生徒たちを4人のグループ(ホームグループ)に分けます。次に各グループのメンバーに1〜4の番号を振り、1は言語、2は知覚、3は感情、4は理性といったように4つの専門グループに振り分けます。

転換が上手に行われない限り、教師が主導する探究から抜け出すことはできません。

私は、生徒の参加の度合いがあまり高くない段階では、比較的簡単に答えられるような質問を個別に聞いていきます。そして、様子を見ながら、「Aさんの意見のXXということについて、Bさんはどう考える?」というふうに、生徒の間に入って議論をつないでいきます。生徒がほかの生徒に「CさんのXXXという主張には、△△△という見方もありますが、それについてどう考えますか」というような問いかけを直接行うようになると、コントロールを手放すよう意

## 「思考習慣」とは、与えられた課題や問題の答えを知らないときに「知的にふるまうすべを知っていること」

合つてまとめた内容を教え合います。私は教室を回り、生徒が与えられた資料や自分の経験などを根拠に挙げながら、筋道の立った説明をしているか確認します。生徒から質問があれば対応し、説明の根拠が不明瞭な場合などは再考を促すような質問をしたりします。

次に、「四つの『知るための方法』のうち、一つ除外しなければならぬとしたらどれを選ぶか」「そもそも人間はどれか一つを欠いても存在し得るのか」についてホームグループで議論します。議論は、自分の専門グループで考察した「知るための方法」がいかに重要であるかを主張しながら進められます。この授業を通じて、生徒たちは、「知るための方法」がそれぞれ独立しているのではなく、さまざまに相互作用しているのだというふうに気づきます。

### 問いを柱とした探究

TOKは、一般的なシラバスに多く見られる、内容や課題などが事前に表示された上で進められる授業ではありません。いく通りもの答えのある「開かれた問い」を柱に、複数の教科の領域を横断して進められます。

う指摘をするようになったりします。

「じゃあ、なぜそう考えるのか」と問いかけると、その生徒が根拠を説明し、さらにほかの生徒たちも参加して議論が展開されることもあります。

TOKの学習を効果的に進めていくことで、自らの経験のなかで獲得した知識を大きな視点で見える習慣が育まれ、柔軟に考える力やさまざまなアイデアを統合する力、物事の全体と個別との間に存在するつながりに気づき理解する力が身につけていきます。

このような生徒の行動と意識の変化を目の当たりにして、TOKの学習は「思考習慣」の育成に大きな影響

TOKと他教科との違いは、生徒に求められるメタ認知スキルのレベルの違いにあるといえるでしょう。物理や音楽など教科の授業では、教科の概念的な理解を深めるために教科に関する知識やスキルを学習します。一方、TOKの授業では、教科固有の知識獲得の方法、知識が果たす役割、身につける方法やスキル、知識そのものの本質などの探究に焦点が当てられます。「知識がどのようにして確立されるにいたったか」に着目しつつ、知識の異なる領域について比較や検証を重ねていくことで、知識の本質や共通する点、異なる点が明らかとなり、私たちが世界を知る上で多種多様な知識がどのような助けとなっているのかを知ることができるといえます。

教師には、生徒一人ひとりの探究を慎重に見守りつつ、適切な方向に進んでいけるよう導く役割が求められます。TOKの授業で重視される「問いかけ」では、生徒の好奇心を刺激し、望ましい方向へと導いていくような意義の高い良い質問とは何かを常に考えていかねばなりません。探究は、最終的には生徒自らが生み出した問いによって支えられるものとなっていくことが重要です。この

を与えるものであると改めて感じました。「思考習慣」とは、与えられた課題や問題を前にして、その答えを知らないときに「知的にふるまうすべを知っていること」と定義されるものです。「思考習慣」をつけることはメタ認知スキルや批判的に考える力の習得にもつながっていきます。

長い学習期間を通して身につけた「思考習慣」は、広い世界のさまざまな場所で活躍していく生徒たちにとって大きな助けとなるはずで、責任ある「地球市民」となっていく生徒たちがこの思考習慣を、これからの人生に生かしていくことができることを強く望んでいます。

### ※ IBディプロマプログラム (DP)

16-19歳の大学入学前の生徒を対象にした2年間の教育プログラム。言語と文学(母国語)、言語習得(外国語)、個人と社会、理科、数学、芸術の6つのグループ(教科)と、「知の理論」「創造性・活動・奉仕」「課題論文」の3つのコアで構成される。修了時に卒業試験を受けて一定の成績を収めると、国際バカロレア資格(国際的に認められる大学入学資格)の取得が可能になる。

### <参考資料>

『Theory of Knowledge Skills and Practice / 知の理論スキルと実践(日本語訳付き版)』(オックスフォード大学出版局、2015年)

非営利教育財団国際バカロレア機構(www.ibo.org)発行の和文資料

● 国際バカロレア (IB) の教育とは  
http://www.ibo.org/globalassets/digital-tookit/brochures/what-is-an-ib-education-jp.pdf

● ディプロマプログラム「知の理論」(TOK) 指導の手引き  
http://www.ibo.org/contentassets/93f68f8b322141c9b113fb3e3fe11659/tok-guide-jp.pdf

● ディプロマプログラム「知の理論」(TOK) 教師用参考資料  
http://www.ibo.org/globalassets/publications/tok-tsm-jp.pdf